

第一回十字軍召集の研究史的考察

八 塚 春 児

教皇ウルバヌス二世がクレルモン教会会議で十字軍を召集したのは、一〇九五年一月のことである。去る一九九五年は九〇〇周年に当り、六月にはクレルモン・フェランで十字軍に関する国際学会が行われたのを始め、色々な企画が催された。本稿では、その第一回十字軍の召集を巡る諸問題を研究史的に考察したい。なお、著作に言及する場合には、著者名の後に()で発表年を入れ、末尾の文献表に対応させている。

隠者ピエール伝説

第一回十字軍の召集といえば、今日では教皇ウルバヌス二世にほぼ全面的にそのイニシャティヴが帰せられている。しかし古くはそうではなく、隠者ピエール伝説というものがあつた。隠者ピエールとは所謂「民衆十字軍」と呼ばれるものを率いたので知られる人物だが、アーヘンのアルベルトはそのエルサレム王国史の

中で、十字軍の開始に關して彼に重要な役割を与えた。即ち、隠者ピエールはエルサレムに巡礼して総大司教よりエルサレムの窮状を聞き、教皇に援助を求めるところを勧めて自ら使者になることを申し出、さらにキリストから夢の告げを受ける。ローマに戻つて教皇に会い、総大司教の書簡を渡して聖地の窮状を訴えるや、教皇はピエールに勸説を託し、このピエールの説教によつてあらゆる階層の人々が遠征に参加した、というのである。アルベルト以前に何らかの先行伝承が形成されていたことも推測されるのだが、この話は後にギョーム・ド・ティルが採用する所となり、一九世紀後半まではこれが定説になつていた。

これに批判を加えたのが H. Hagenmeyer (1879) である。彼は、同時代史料の中にこのような話は何も見いだせないことを指摘し、隠者ピエール伝説を否定した。以後はこちらが定説となつて、今日では第一回十字軍召集のイニシャティヴは専らウルバヌス二世

に帰せられるのが普通である。従って、議論は主としてウルバヌスを巡って行われることになるのだが、以下ではそれらを問題別に検討して行くことにする。

ピアチェンツァ教会会議

最初にピアチェンツァ教会会議の問題がある。クレルモン會議に先立つ一〇九五年三月、北イタリアのピアチェンツァで教会會議が開かれた。ベルノルト・フォン・ザンクト・ブラジエンの年代記によれば、この會議にビザンツ皇帝の使節が到来して救援を要請し、これに対して教皇は多くの者達をこの支援へと駆り立てた、というのである。これは、ウルバヌスが何を契機にして十字軍を思いついたかという問題に関わり、このベルノルトの叙述の信憑性を巡って、議論が生じることになる。二〇世紀初頭までは、未だその信憑性が確定しておらず、例えば Röhricht (1901) はベルノルトの叙述を事実として受け入れているが、E. Tschili (1907) はなお否定的であった。しかし、D. C. Munro (1922) 以後、ベルノルトの叙述の信憑性を支持する見解が一般的になった。W. Holtzmann (1924)、A. Fliche (1927)、P. Charanis (1949) などはいずれも積極的にベルノルトの信憑性を主張している。F. Chalandon (1925) が、なおかつこの自己の見解 (1900) を繰り返

返してベルノルトを否定しているのを除いて、一九二〇年代以降は大体ベルノルトの叙述をそのまま事実として受け入れている研究者が多い。今日では特にベルノルトの信憑性については問題にすることなく、それを踏まえて論を展開するのが普通であり、ウルバヌスに軍隊召集の直接的契機を与えたものが、アレクシオス一世の要請であったことは、ほぼ認められている。

ただ、ピアチェンツァではビザンツ救援軍という性格が強く、問題になるのは、それがクレルモンまでの約半年余りの間にどう変化したか、或いはしなかったかということである。そして、そこからさらに複合的な二つの問題が出てくる。一つは、クレルモンでは実際にどのような演説が行なわれたのかということ、今一つは、それを踏まえた上でそのようなクレルモンでの演説をウルバヌスが決意したのは、いつ、どこで、どのようなことを契機にしてか、という問題である。

クレルモン演説の再構成

まず最初の、クレルモンではどのような演説が行なわれたかについてだが、これを解明するのはかなり困難である。問題は史料の欠如であり、ウルバヌス演説の直接の記録は残されていない。いくつかの年代記類が演説を報告しているが、早いものでも数年

以上後に書かれており、エルサレムの占領という、十字軍の結果を前提としている。ただ、ウルバヌスの書簡で十字軍に関するものが数通残っており、演説の再構成にはそれらを援用することになる。

これについても基礎的な研究をしたのは Munro である(1906)。彼はフーシェ・ド・シャルトル、修道士ロベール、ボードリ・ド・ドル、ギベール・ド・ノジャン、ウィリアム・オヴ・マームズリーの五作品に同時代史料を限定し、その中からフーシェ・ド・シャルトルの作品を中心に、一致点の析出に努めた。わが国では橋口倫介氏の岩波新書『十字軍』(一九七四)は、この Munro の結論を「今日でもそのまま定説として踏襲されてくる」として、演説風に書き直して載せている。しかし、実際には Munro の結論は必ずしも研究者の間にそのまま受け入れられているわけではなく。S. Runciman (1951) / K. M. Setton (ed.) (1955) / H. E. Mayer (1965) 等、戦後の代表的な通史においても、それぞれ独自の立場から演説の再構成を試みている。いずれにせよ、これら年代記類の叙述は後の事実の影響を受けていること、更には個々の作者の神学的・文学的等々の個人的関心の影響を受けていることから、結局それらの作品から知られるものは、ウルバヌス二世が実際に行なった演説というより、むしろ十字軍とその結果を目

のあたりにしたそれぞれの作者の十字軍観であるというのが、今日の多くの研究者の見解である。

例えば Fliche (1927) はクレルモン会議のカノンの内エルサレム行に関する条項、フランドル宛書簡におけるアデマールに関する規定、及びレーモン・ド・サンジルの使者の到来という三点に、確実な事実を限定した。P. Rousset (1945) も、カノンと二通の書簡(フランドル宛とボロニャ宛)のみを真正の史料と認めている。こうしたカノンや書簡に史料を限定する方法は、S. Riley-Smith (1986) (1987) も採るところである。因みに、クレルモンのカノン及び会議そのものについては、R. Somerville の一連の作品 (1970) (1972) (1974) (1976) が有益である。

最近の興味深い研究方向としては、P. J. Cole (1991) がある。これはクレルモン演説も含めた十字軍説教を、当時の説教のコンテキストの中で理解しようというもので、引用された古典や用いられた概念等を、同時代の他の説教との比較や、修道院における学問との関連で検討しようというものである。

いずれにせよ、クレルモン演説の再構成は困難なのだが、中でも問題になるのは、エルサレムの重要性である。これについては後述するが、エルサレムがウルバヌスの十字軍計画のなかでどの程度のウェイトを占めていたかという問題である。十字軍にとっ

てエルサレムを決定的に重要な要素とする一般的印象からすれば、このような問題設定は意外感を与えるかもしれない。しかし、この点については意見の対立があり、クレルモン演説の中でエルサレムの果たした役割を低く評価する論者も少なくない。クレルモンにおいても中心主題はビザンツ救援であって、エルサレムは言及されなかった、或いはされたとしても付随的に過ぎなかった、という説や、ウルバヌスにとって問題であったのは東方教会一般さらにはキリスト教世界一般であって、エルサレムはその一部に過ぎなかった、というものまで様々ながら、いずれにせよエルサレムの果たした役割を低くする立場が一方である。この立場からすると、ピアチェンツァからクレルモンの間で、あまり大きな変化はなかったということになる。一方、クレルモンではエルサレムが前面に出たと主張する立場も勿論あり、この場合にはピアチェンツァとクレルモンで主題が変化したことになる。

ピアチェンツァからクレルモンへ

ところで、主題変化を論ずる場合には、いつ、どこでビザンツ救援からエルサレム解放に変化したのかということが、まず問題となる。そこから必然的に、ピアチェンツァからクレルモンまでのウルバヌスの旅程を確定する必要がある。これも必ずしも

簡単な作業ではなく、例えばイタリアからフランスへは、ジェノヴァから海路を取ったというのとアルプス越えて来たというのと両説があったりする。フランス国内の旅程に関しては、R. Crozet (1937)などを始めとして研究が進み（因みに彼はアルプス越え説であり、今日ではそちらが定説である）、各地の修道院等に残された文書をもとに、今日ではほぼ確定されている。しかし、G. Beech (1995)に見られるように、なお現在でも新発見の史料により、細部では修正がなされている状況である。

さて、ピアチェンツァからクレルモンへの主題の変化を問題にする際、焦点となるのは二つの地点、即ちル・ピュイとクリュニーである。クリュニーが問題になるのは、それ以前の巡礼やスベインとの関わりからであり、F. Chalandon (1925)、A. C. Krey (1948)、S. Runciman (1950) (1961)などがクリュニーの影響を重視している。一方、ル・ピュイは第一回十字軍に際し、教皇特使として派遣されたアデマール・ド・モンティユが司教をしていた地であり、このル・ピュイからウルバヌスはクレルモン会議の召集状を発したのである。ウルバヌスが決意をした時期として、このル・ピュイ潜在を重視するのは、W. Holtzmann (1924) や A. Fliche (1927) である。

しかし、このようなことを確定するのは史料的に無理があり、

最近ではあまり「いつ、どこで」ということは問題にされていない。議論を複雑にすることになるが、ピアチェンツァからクルルモンへの主題の変化は表面的で、実はピアチェンツァにおいて既にウルバヌスはエルサレムを心中に抱いていたと主張する論者もいる。A. Cartellieri (1936) / P. Charanis (1952) / F. Duncaif (1955) などそれぞれある。ちじや、H. E. Mayer (1960) や J. Riley-Smith (1986) (1987) などは、ウルバヌスの計画が登位以来の長期的なものであったことを強調しており、その立場からすれば、ピアチェンツァ・クルルモン間の主題の変化などあまり重要ではないことになる。

アダマール・ド・モンティユ

ところで、ル・ピュイ司教アダマールについては、別の点からも議論の対象になった。つまり、ウルバヌスの意図を知り得る史料が非常に少ないことから、このアダマールが教皇特使として十字軍の過程でどのように行動したかということを考察して、ウルバヌスが十字軍にかけた意図を探ろうという試みである。古い時代にはアダマールの役割を高く評価する論者が多かった。つまり、アダマールは十字軍に際して世俗的なリーダーシップをも委ねられ、軍中におけるウルバヌスの代理として彼の意向を十全に体现

していたかの如くである。その結果、例えば B. Leib (1924) や A. C. Krey (1948) は、アダマールを東西両教会統一政策の実行者として扱った。F. Duncaif (1955) でもなおアダマールは俗人の長をも兼ねた、戦う司教として描かれている。しかし、近年になるにつれて、アダマールの役割は軽く評価される傾向にある。Duncaif 同一年に出た J. H. & L. L. Hill (1955) は上記のようなアダマール像が伝説であって実証できないこと、アダマールの仕事で確実なものは、祈禱、プロセッション、幻視調査などの宗教業務が大半であることを主張した。これについては J. A. Brundage (1959) が反論したが、やはり大半は情況証拠から来る推論を出ておらず、翌年には H. E. Mayer (1960) が再反論して、Hill 説を補強した。いずれにせよ、アダマールについても実証的に知られる所は非常に少ないのは確かであり、しかも路次に没したことが困難を助長して、彼を通じてウルバヌスの意図を推測する試みには限界がある。

レーモン・ド・サンジル

これに関連して、トゥールーズ伯レーモン・ド・サンジルについても述べておく必要がある。十字軍参加諸侯の一人だが、様々な理由から彼もウルバヌスの意向を体现していたのではないかと

される人物である。その際、重視されたのは教会統一問題との関連におどてである。F. Duncalf (1928) / A. C. Krey (1948) / J. H. Hill (1951) / C. Cahen (1954) / J. H. & L. L. Hill (1962) など、いずれも彼が統一政策に協力したことを主張し、その妨害者としてのボエモンと対立させる図式を出している。ただ、このレーモンについても簡単に結論が出せないことは、アデマールと同様である。ほぼ確実だと思われることは、ウルバヌスがクレルモン以前にレーモンから参加を確保しておいたことである。そのことから、彼はウルバヌスが最初に想定した軍事的リーダーとして考えられがちであり、最新の J. Riley-Smith (1985) もそう述べているが、なおリーダーとしての内実は不分明なままである。

エルサレムの重要性

そこで、残しておいたエルサレムの問題に戻る。即ち、クレルモン演説におけるエルサレムの重要性に関してである。前述のようにこの点については意見の対立があり、クレルモン演説の中でエルサレムの果たした役割を低く評価する論者も少なくない。それをはっきり主張するのは H. E. Mayer (1965) であり、クレルモン演説ではエルサレムは言及されなかったという。それが、フランドル宛書簡では二義的ながら登場し、ボロニャ宛では明白

にエルサレムが目的になるのは、世論に圧倒された結果であるとす。但し、クレルモン会議のカノンにエルサレムが言及されていることは認めており、その辺りの説明は不明確である。これに対して、ウルバヌスが常にエルサレムを中心に考えていたことを主張するのは、H. E. J. Cowdrey (1970) である。H. E. Mayer (1972) は Cowdrey に反論したが、カノン中でのエルサレム言及に関して、それは東方教会一般の文脈の中であると説明している。今日ではクレルモンにおいてエルサレムが全く述べられなかったと主張する論者は流石にいないようである。問題になるのは、中心主題がエルサレムであったのか、それともウルバヌスの意向は東方教会一般にあり、エルサレムはその一部に過ぎなかったのか、という点である。

更に、東方教会は、キリスト教世界へと概念を拡大することができるのだが、この問題は後に詳論するので、ここでは、エルサレムのウエイトの問題に関する限りで述べておく。つまり、同じようにキリスト教世界を重視する論者にも、エルサレムに関しては相違があるからである。例えば、最初にキリスト教世界の概念を本格的に問題にした C. Erdmann (1935) は「行進目標」Marschziel・「戦争目標」Kampfziel と二つの概念を用いて、エルサレムを前者とし、本来の目標である「戦争目標」はキリスト教世

界の解放であるとした。これによれば、エルサレムは部分的な目標という意味しか持たないことになり、こうした捉え方は、M. Viley (1942) や P. Alphandery (1954) にも受け継がれている。しかし一方で、Erdmann 流のキリスト教世界観と同様の立場を取りながら、J. Riley-Smith (1981) (1986) (1987) は、繰り返しエルサレムが最初から中心的な目的地であったことを主張して、エルサレムの重要性を強調する。しかし、Riley-Smith 学派の筆頭とも言える N. Housley (1992) は、ウルバヌスがクレルモンで演説した時、エルサレムの解放を第一に考えていたとは言えない、と断言しており、なお議論は様々である。

このように、ウルバヌスの意図のなかでエルサレムの果たした役割が問題になったのは、それがその外の色々な問題と密接に関わらざるをえないからである。つまり、既に少し言及したビザンツとの関係を始めとして、ウルバヌスが十字軍にかけた諸政策の評価の問題、また巡礼の伝統との連続性の問題、或いは所謂「非東方十字軍」の問題、そしてそれらすべてに関わってくるキリスト教世界観の問題等々が、このエルサレムと密接な関係を持たざるを得ないからである。そこで次には、これらの諸問題を順次検討して行きたい。

教会統一

ウルバヌスが十字軍にかけた政策は第一回十字軍の召集を巡る重要な論点であった。ビザンツ救援が重要な課題であったとする説も、これに関わっている。つまり、ウルバヌスは十字軍を契機にコンスタンティノープル教会との統一政策を推し進めようとしたというのである。この教会統一問題はウルバヌスの諸政策を検討する際に重視された論点であり、多数の研究者がこれに関与している。それを中心主題に論じたのは B. Leib (1924) / W. Hozmann (1924) (1928) / A. C. Krey (1948) / P. Charanis (1948) / S. Runoiman (1950) (1955) などだが、他の研究者も多少少なからぬこの問題には言及している。これについては筆者も以前に考察をしたことがあるので、詳細はそれに譲る（第一回十字軍と教皇——教会統一問題を中心に——）青山吉信・木村尚三郎・平城照介編『西欧前近代の意識と行動』刀水書房、一九八六）。

神聖ローマ帝国との闘争

他には神聖ローマ帝国との闘争のなかに位置付ける見方がある。一つは十字軍によって帝国に対する精神的優位を確立しようとしたという説である。これは後述のキリスト教世界観の問題とも結びつくのだが、一見説得力のあるこの説明の仕方も、具体相とな

ると不鮮明であり、必ずしも決定的なことは言えなくなってくる。つまり、十字軍の召集及びその結果としての第一回十字軍の成立と、それ以後の帝国との闘争の帰趨が具体的にどう関係するのかわかれないのである。従って、一般論としてを除けば、研究対象としてこれを正面から取り上げたものはあまり見られない。

Newhall (1927) などは民衆運動とこれを結びつけ、ウルバヌスの意図は成功したと結論しているが、あまり論理的とは言えない。

むしろ比較的確実なのは、帝国との闘争一般ではなく、対立教皇クレメンス三世との抗争と関連づけることである。既に Conte Riant (1883) がそれを主張しているが、十字軍によってウルバヌスが決定的に優位に立ったのは、この対立教皇クレメンスとの関係においてであったという説である。その場合、Holtzmann (1924) (1928) が論証したように、それは対外的側面、特にビザンツとの関係において顕著であり、この点では上述したビザンツ救援の問題、及び教会統一の問題とも密接に関連する。

平和運動

他には平和運動の一環として十字軍を捉える見方がある。つまり内戦を外征に転化することにより、西欧内部に平和をもたらしうというものである。これは史料のかなり明確に導きだし得る

殆ど唯一のものと言ってよく、いずれの論者もこの点に関してはほぼ一致している。殊に J. Riley-Smith (1977) はこれを十字軍思想の発展と結びつけ、ウルバヌスが「古い騎士Ⅱ内戦者」と「新しい騎士Ⅱ価値ある戦いをする騎士」という二つの騎士像の区別を強調したことに注目し、後のサン・ベルナルへの影響を指摘した。

セルジューク・トルコの位置け

議論は再三エルサレムの問題に戻るが、以上のような政策を強調することは、必然的に十字軍におけるエルサレムの重要性を低くすることになる。しかし、エルサレムの解放を第一におく主張も勿論存在する。十字軍といえは、セルジューク・トルコの侵入による聖地のキリスト教徒の迫害や巡礼の妨害を主たる理由にするのが、かつての定説であった。今日の教科書では必ずしもこの説を採用しておらず、もはやこれを「教科書的叙述」と呼ぶことはできないのだが、この種の説を比較的早く批判したのは C. Erdmann (1935) であった。それをさらに詳論したのは C. Cahen (1954) であり、彼等によれば、近東地方のキリスト教徒が置かれていた状態はトルコ人の到来によっても大きな変化はなかったという。また、巡礼にとっても同様であり、巡礼妨害はトルコ人

の到来と無関係であるという。直接の脅威を受けたのはビザンツ帝国であり、実際、ウルバヌス二世に軍隊召集の直接的契機を与えたものがビザンツ皇帝アレクシオスの要請であったことは前述の通りである。

しかし、十字軍の召集にとって、セルジューク・トルコを無視してよいかどうかは、なお疑問である。この時代に巡礼妨害が激化したかどうかより、一一世紀における巡礼の盛況化の方を考慮しなければならぬ。巡礼の盛況化が、東方情勢についての知識を増やし、かつてはあまり気にならなかった異教徒による支配を殊更苦痛に感ぜしめる契機となったことは考え得る。また、組織的妨害はなくても、在地支配者の統率力欠如や戦乱による無秩序が巡礼を困難にし、それが巡礼妨害と受け取られたこともあり得ることである。B. Hamilton (1994) はトルコ人が近東に侵入した一〇七〇年代以降エルサレム巡礼の人数が減少したことを指摘して、第一回十字軍の目的は、参加者の観点からはトルコ人からのエルサレム解放であったことを主張している。確かに、参加者にとってはそうであっただろう。クレルモン演説を伝える作品の中には、トルコ人による東方のキリスト教徒迫害はもとより、巡礼妨害についても言及しているものがある事実は軽視できない。しかし、やはり問題は、十字軍を召集したウルバヌス二世がどの

ように東方情勢を把握していたか、そしてもたらされた情報をいかに受けとめていたかである。その点では、なお問題は未解決といわねばならない。

宗主権・教会国家

このようなエルサレム解放と結びつく政策としては、他に宗主権政策ないし教会国家建設政策と呼ばれるものがある。再征服された地に教皇が宗主権を要求する、またはそこに教会国家を建設するというものであり、これはスペインや南イタリアのような、それ以前に再征服が進展していた地で追求された政策を、東方でも同様に追求する、或いはさらに発展させるといった政策である。スペインに関しては、以前からレコンキスタとの関係が深かったクリュニーやレーモン・ド・サンジルが、ここでも問題になる。クリュニーの影響の評価などに関しては論者の間に相違もあるが、総じてウルバヌスがこれらの政策を意図していたと想定している研究者は多い。エルサレム王国の「純粹封建制」論で知られる J. La Monte (1932) も、ウルバヌスが教会国家を建設する意図を持っていたことを前提にして論じている。但し、これも、教皇特使アデマールがアンティオキアで没し、ウルバヌス自身もエルサレム陥落の僅か二週間後に没したことにより、解明が困難であ

る。

これに関連して、エルサレム占領後国王に選ばれたゴドフロワ・ド・ブイヨンの称号を巡る議論も近年行なわれていく。ゴドフロワは、王の称号を拒否して「聖墓守護者」*advocatus sancti sepulchri*と称したといわれており、かつてはこれがウルバヌスの教会国家建設意図を考慮した結果であるとして、この政策を主張する研究者の論拠の一つになっていた。しかし、J. Riley-Smith (1979) は、この称号が現れるのはライヴァルであったレーモン・ド・サンジール周辺の史料のみであり、ゴドフロワ自身は *dux* や *princeps* と称していたことを論証して、「聖墓守護者」の史料的価値に疑念を表明した。これに対して、A. V. Murray (1990) は、ゴドフロワが *princeps* と *advocatus* の両方を用いていたのではないかと推定しているが、いずれにせよ、今日では「聖墓守護者」の称号は留保つきでしか利用できなくなっている。

それ以前との連続性

そこで次には、もう少し広いバースペクティヴのなかに第一回の十字軍の召集を位置付ける見解を紹介して行きたい。

一つはそれ以前の類似の運動との連続性を考察するという方法である。先述のスペインや南イタリアとの連続性というのが一つ

の例だが、問題になるのは宗主権政策ばかりではない。例えば、対異教徒戦への贖宥付与も重要な点であり、多くの論者が注目するバルバストロ遠征（一〇六三—一〇六四）やタラゴナ戦（一〇八九）、或いは H. E. J. Cowdrey (1977) にモノグラフのあるマーディア遠征など、いずれも十字軍への先駆として把握されている。また、C. Erdmann (1935) が十字軍思想形成の観点から重視した聖ペトロの旗の授与や *militia sancti Petri* もそれに当る。

このような問題において、重要な論点になるのはグレゴリウス七世との連続性である。ウルバヌス二世からは二代前、と言ってもヴィクトル三世は即位後間もなく没したので、事実上ウルバヌスはグレゴリウス七世の後継者と言ってもよいのだが、ウルバヌスはグレゴリウスのもとで教皇特使を勤めるなど重要な役職にあり、グレゴリウスの政策を熟知していたと考えられる。そうしたグレゴリウス七世との連続性を考える場合、一つは聖戦理念との関わりで見に行く方法があり、C. Erdmann (1935) は特にゲレゴリウスの考察に力点を置いている。また先述の宗主権政策との関係で捉える見方もあり、更にはこれも後述のキリスト教世界観でまとめるやり方もある。

ただ、グレゴリウスとの連続性という問題で最も注目を集めるのは、所謂「グレゴリウス七世の東方計画」別名を「十字軍計画」

とも呼ばれるものである。

グレゴリウス七世の東方計画

これは文字通り計画だけに終わって実行に移されることのないものだが、一〇七四年、グレゴリウス七世は自らが率いる東方遠征軍を計画した。この中ではエルサレムも言及されているが、主たる目的はビザンツ救援であり、その後には東西両教会統一への志向があった。従って、このグレゴリウスの計画とウルバヌスの十字軍との連続性の有無の問題は、結局ウルバヌスにとって十字軍は何であったかという所に戻らざるを得ない。つまり、ウルバヌスの十字軍にとって、ビザンツ救援や、その後にある東西両教会の統一への志向が重要であったかどうかという、先に述べた問題への解釈如何によって、グレゴリウスとの連続性の問題も解答が決まってくるのである。

従って、この問題も、第一回十字軍の召集を考える上で定番の問題の一つと言ってよく、大概の論者が言及している。我が国では、野口洋二『グレゴリウス改革の研究』（創文社、一九七八）に良くまとめられた形で提供されており、それに関しては、上掲拙稿（青山・木村・平城編『西欧前近代の意識と行動』）で論じているのでそれに譲る。

巡礼の伝統と聖戦

このような連続性という問題では、巡礼の伝統も重要である。実際、十字軍はエルサレム巡礼の一形態という側面をもっており、十字軍が開始された当時はこの新しい運動は巡礼乃至はそれに類する用語で表現されていた。しかし、ウルバヌスが召集したものはただの巡礼ではない。それ以前から存在した巡礼とは区別される特色をもっており、それが後世「十字軍」という特別の名前で呼ばれるようになった所以である。つまりは聖戦としての性格であり、十字軍というものは巡礼と聖戦との結合したものとと言えるのである。しかも、ウルバヌス二世自身はこの運動を通常の巡礼とは区別された特別のもの、むしろ聖戦としての性格の強いものと意識していたことは、彼の書簡から推定されるところである。これについては、拙稿「開始期の十字軍における巡礼と聖戦」『桃山歴史・地理』二八号（一九九四）を参照されたい。

教皇の意図と十字軍士の意図・行動との乖離

こうしたウルバヌスの意識は、彼が想定していた軍隊の規模とも関わっており、ウルバヌスはレーモンとアデマールの率いる比較的小規模な軍隊を考えていたらしいこと、しかもそれは、非戦闘員を含まない、騎士層を中心にした軍隊であったということは、

今日のはぼ定説になっている。しかし、実際に生じたものは、そうした予想をはるかに超えるものであり、そこから、ウルバヌスの意図と実際の十字軍参加者の意図や行動との乖離の問題が生じてくる。

そして、それは軍隊規模に関してばかりではなく、幾度も言及したエルサレムの位置づけに関してもそうである。ウルバヌスの意図はビザンツ乃至は東方教会一般、更にはキリスト教世界全体であって、エルサレムは必ずしも重要ではなかったと主張する論者達は、いずれもこの乖離を指摘する。つまり、十字軍参加者にとっては常にエルサレムが第一の目標と考えられたのである。しかもその際、そこにウルバヌスの意図的な政策を考える論者もいる。例えば、C. Erdmann (1935) によれば、ウルバヌスの目的はキリスト教世界の解放であり、エルサレムはその一部に過ぎなかったが、軍隊徴募の手段としてエルサレム巡礼の伝統と結びつけ、その結果、人々の間では単純にエルサレムが本来の目的として認識されたという。また、C. Calen (1954) は、ウルバヌスによる「主題のすり替え」ということを言う。

そうした意図的な「すり替え」があったかどうかはともかく、こうした乖離については他の点に関しても主張される。例えば、ウルバヌスが教会統一政策を意図していたとする立場からも、そ

の失敗の一因としてこれが指摘される。つまり、一般の十字軍士はウルバヌスの意図を理解せず、ビザンツとの和解を図るところか、却って対立を助長したといふのである。更に、J. Riley-Smith (1980) (1986) (1987) が大きな関心を払っているキリスト教徒にとっての暴力の問題乃至はそれと結びつく隣人愛の問題にとっても、理念と現実との分裂という形で、この乖離は関わってくる。

聖戦理念

話題は前後するが、聖戦理念の形成も十字軍の成立にとって重要な論点になっている。これについては C. Erdmann (1935) が古典的研究であり、今日もなお有効な点が多い。筆者も従来から機会あることに言及してきたが、「第一回十字軍の召集」『歴史と地理』四七一号（一九九四）で梗概を紹介しているので、参照されたい。

最近では J. Riley-Smith (1977) (1986) (1987) がこの問題に深くかかわっている。彼の場合には、特に「正戦」just war と「聖戦」holy war の区別を強調することにより聖戦理念の密着化を計った。即ち、「正戦」はアウグステイヌスに起源を持つ概念で、一定の条件下に正当と認められるのだが、本質的には戦いは罪深いものであり、あくまで「容認」されるに過ぎない。これ

に対し「聖戦」は、九—一世紀に形成された概念で、キリスト教世界全体に関わる積極的に聖なるものとして、キリスト教徒にとっての義務となった。そして、それには贖宥が結びつき、教皇の特別な所管事項になったのである。

このように十字軍における教皇の役割を重視すること、及びそれと関連して贖宥の問題を重視すること、Riley-Smithの特徴である。因みに、かつてはクレルモンで「全贖宥」が与えられたとするのが一般的であったが、H. E. Mayer (1965) は、クレルモンのそれは全贖宥ではなく、むしろ全贖宥の概念は十字軍の発展の過程で成立して行くことを主張した。Riley-Smithはこれを進めて、ウルバヌスの場合は「功德」meritに基礎を置いた古いタイプのもので、また本来の意味での贖宥とは呼べないことを指摘した。鍵の権の仲介による神の憐みに基礎を置いた本来の贖宥論の完成はインノケンティウス三世を待たねばならないのである。更に、Riley-Smithは、ウルバヌス以後の発展を重視する。つまり、十字軍参加者の行軍中の体験が十字軍思想に新たな展開をもたらし、それを神学的訓練を積んだ注釈者達—年代記作者達が一整理して、洗練させたのである。

キリスト教世界観

そして、Erdmann から H. Roscher (1969) を経て、Riley-Smith がいたるラインで特に重要な概念が、「キリスト教世界」christiantas 観である。これは全キリスト教徒の共同体であり、キリスト教共和国（或いは「国家」と訳した方がよいかもしれない）res publica christiana とどう言葉でも表現される。これはキリストによって支配される普遍的で、世俗の国家や民族を超越する単一国家であり、地上におけるキリストの代理人は教皇、司教、皇帝、国王達、特に教皇はその筆頭である。

そしてこのキリスト教世界に自由を保障すること、それがキリスト教世界の「解放」liberatio という用語で表現されるのだが、それがキリスト教徒の義務になる。しかも、それは教会改革以後の教皇の理念であってみれば、当然教皇の下での自由を意味した。従って、「キリスト教世界」は「カトリック世界」と言い換えることもできるのだが、勿論その中に東方の諸教会を始めとしてあらゆるキリスト教徒を含むのである。そしてまさに十字軍は、このキリスト教世界の解放のためになされたのである。

十字軍研究にとって、この概念は色々な場面で有用さを発揮するのだが、本稿の課題にとっても非常に重要である。つまり、ウルバヌスの意図を巡る論争のうち、ビザンツ乃至東方教会一般か

エルサレムかといった論争、神聖ローマ帝国との闘争や平和運動との関係、またスペインや南イタリア等他の地域での政策との連続性といった議論は、ある意味で解決できるのである。つまり、それらはいずれもこのキリスト教世界の解放という大きな目標の一部であり、すべてが有機的に関連するのである。

そしてそれは同時に、「非東方十字軍」の評価とも関わってくる。つまり、十字軍というものがキリスト教世界の解放のためになされる以上、その目標はひとりエルサレムに限らず、スペインであれ東ドイツであれ、はたまたアルビジョア派を始めとする異端であれ、更には皇帝のような世俗権力であれ、いずれも同様に十字軍の一環として行われ得るのである。

これは一見、本稿の課題を越えるようだが、そうではない。この非東方十字軍の問題は、十字軍の「政治化」や「逸脱・乱用」という問題と密接に結びつき、その際、「本来の十字軍」乃至は「理想的十字軍」としての第一回十字軍が常に引き合いに出されるからである。そしてそこから、議論は繰り返し出しに戻る。第一回十字軍にとって、エルサレムは決定的に重要な目的であったのか、それともキリスト教世界の一部という意味しか持たなかったのか。

もはやこれ以上繰り返す必要はあるまい。ただ、キリスト教世

界観に関して、最近の注目すべき指摘を紹介しておこう。J. Frano (1995) によれば、ウルバヌスの十字軍召集にはパラドクスがあるという。ウルバヌスは全キリスト教世界の統一という基礎の上に彼のアピールを行なったのだが、実際には、既に形成されていた「ラテン世界＝西欧キリスト教世界」を動員したのである。そして、それにより、十字軍という形で現実化された西欧キリスト教世界のアイデンティティーを確立したという。

第一回十字軍に限らず、十字軍というものの研究史を整理していく気が付くことは、近現代にあっても、十字軍はまさに西欧キリスト教世界のアイデンティティーの可視的表現であり続けていることである。恐らくそれが、欧米においては最も研究文献の多い分野の一つである一方、我が国では十字軍研究が根付きにくい根本的理由なのかもしれない。

文献

- 以下の文献は、本文中に名前を挙げたもののみであり、当該問題について網羅したものではない。従って、有益な作品であっても、文脈上や紙幅の都合上言及できなかったものも含めたいらな。
- Alphandéry, P., *La Chrétienté et l'idée de croisade, Les Premières Croisades*, 1954.
- Beech, G., "Un Texte nouveau sur Urban II et la première croisade", 4^e Colloque international de la Society for the study of the Crusades and the Latin East, Clermont-Ferrand, 22-25 juin 1995.
- Brundage, J. A. "Adhemar of Puy: the Bishop and His Critics", *Speculum*, XXXIV, 1959.
- Cahen, C., "An Introduction to the First Crusade", *Past and Present*, VI, 1954.
- Cartellieri, A., *Der Aufstieg des Papsttums in Rahmen der Weltgeschichte, 1047-1095*, 1936.
- Chalandon, F., *Essai sur le règne d'Alexis 1^{er} Comnène (1081-1118)*, 1900.
- Chalandon, F., *Histoire de la première croisade jusqu'à l'élection de Godefroi de Bouillon*, 1925.
- Charanis, P., "Communications to the Editor of the American Historical Review", *American Historical Review*, LIII, 1948.
- Charanis, P., "Byzantium, the West and the Origin of the First Crusade", *Byzantion*, XIX, 1949.
- Charanis, P., "Aims of the Medieval Crusades and How They Were Viewed by Byzantium", *Church History*, XXI, 1952.
- Cole, P. J., *The Preaching of the Crusades to the Holy Land, 1095-1270*, 1991.
- Comte Riant, "Un Dernier Triomphe d'Urban II.", *Revue des questions historiques*, XXXIV, 1883.
- Cowdrey, H. E. J., "Pope Urban II's Preaching of the First Crusade", *History*, LV, 1970.
- Cowdrey, H. E. J., "The Mahdia campaign of 1087", *The English Historical Review*, XCII, 1977.
- Crozet, R., "Le Voyage d'Urban II et ses négociations avec le clergé de France (1095-1096)", *Revue historique*, CLXXIX, 1900.

- 1937.
- Duncalf, F., "The Pope's Plan for the First Crusade", L. J. Paolet (ed.), *The Crusades and Other Historical Essays Presented to Dana C. Munro by His Former Student*, 1928.
- Duncalf, F., "The Councils of Piacenza and Clermont", K. M. Setton (ed.), *A History of the Crusades*, vol. I: *The First Hundred Years*, 1955.
- Erdmann, C., *Die Entstehung des Kreuzungsgedankens*, 1935.
- Fliche, A., "Urban II et la croisade", *Revue d'histoire de l'église de France*, XIII, 1927.
- France, J., "La Conception de la chrétienté latine au XI^e siècle", 4^e Colloque international de la Société for the study of the Crusades and the Latin East, Clermont-Ferrand, 22-25 juin 1995.
- Hagenmeyer, H., *Peter der Eremit*, 1879.
- Hamilton, B., "The Impact of Crusader Jerusalem on Western Christendom", *Catholic Historical Review*, LXXX, 1994.
- Hill, J. H., "Raymond of Saint Gilles in Urban's Plan of Greek and Latin Friendship", *Speculum*, XXVI, 1951.
- Hill, J. H. & L. L., "Contemporary Accounts and the Later Reputation of Adhemar, Bishop of Puy", *Medievalia et Humanistica*, IX, 1955.
- Hill, J. H. & L. L., *Raymond IV, Count of Toulouse*, 1962.
- Holtzmann, W., "Studien zur Orientpolitik des Reformpapstums und zur Entstehung des ersten Kreuzzuges", *Historische Vierteljahrschrift*, XXII, 1924.
- Holtzmann, W., "Die Unionsverhandlungen zwischen Kaiser Alexios I. und Papst Urban II. in Jahre 1089", *Byzantinische Zeitschrift*, XXVIII, 1928.
- Housley, N., "Jerusalem and the Development of the Crusade Idea, 1099-1128", B. Z. Kedar (ed.), *The Horns of Hattin*, 1992.
- Krey, A. C., "Urban's Crusade—Success or Failure", *American Historical Review*, LIII, 1948.
- La Monte, J. L., *Feudal Monarchy in the Latin Kingdom of Jerusalem 1100 to 1291*, 1932.
- Leib, B., *Rome, Kiev et Byzance a la fin du XI^e Siècle, Rapports religieux des Latins et des Gréco-Russes sous le pontificat d'Urban II (1088-1099)*, 1924.
- Mayer, H. E., "Miszellen zur Beurteilung Adhemars von Le

- Puy", *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters*, XVI, 1960.
- Mayer, H. E., *Geschichte der Kreuzzüge*, 1965.
- Mayer, H. E. (trans. by J. Gillingham), *The Crusades*, 1972.
- Munro, D. C., "The Speech of Pope Urban II. at Clermont, 1095", *American Historical Review*, XI, 1906.
- Munro, D. C., "Did the Emperor Alexius I. ask for Aid at the Council of Piacenza, 1095?", *American Historical Review*, XXVII, 1922.
- Murray, A. V., "The Title of Godfrey of Bouillon as Ruler of Jerusalem", *Collegium Medievale*, III, 1990.
- Newhall, R. A., *The Crusades*, 1927.
- Riley-Smith, J., *What were the Crusades?*, 1977.
- Riley-Smith, J., "The Title of Godfrey of Bouillon", *Bulletin of the Institute of Historical Research*, LII, 1979.
- Riley-Smith, J., "Crusading as an Act of Love", *History*, LXV, 1980.
- Riley-Smith, L. & J., *The Crusades: Idea and Reality 1095-1274*, 1981.
- Riley-Smith, J., *The First Crusade and the Idea of Crusading*, 1986.
- Riley-Smith, J., *The Crusades, A Short History*, 1987.
- Riley-Smith, J. (ed.), *The Oxford Illustrated History of the Crusades*, 1995.
- Röhricht, R., *Geschichte des Ersten Kreuzzuges*, 1901.
- Roscher, H., *Papst Innocenz III. und die Kreuzzüge*, 1969.
- Rousset, P., *Les Origines et les caractères de la première croisade*, 1945.
- Runciman, S., "Adhemar of Le Puy and the Eastern Churches", *Actes du VI^e congrès international d'études byzantines (Paris, 1948)*, I, 1950.
- Runciman, S., *A History of the Crusades*, vol. I: *The First Crusade and the Foundation of the Kingdom of Jerusalem*, 1951.
- Runciman, S., *The Eastern Schism, A Study of the Papacy and the Eastern Churches during the XIth and XIIth Centuries*, 1955.
- Setton, K. M. (ed.), *A History of the Crusades*, vol. I: *The First Hundred Years*, 1955.
- Somerville, R., "The French Councils of Pope Urban II:

- Some Basic Considerations", *Annuaire Historique Conciliorum*, II, 1970.
- Somerville, R., *The Councils of Urban II, vol. I: Decreta Claronontensis*, 1972.
- Somerville, R., "The Council of Clermont (1095), and Latin Christian Society", *Archivum Historiae Pontificiae*, XII, 1974.
- Somerville, R., "The Council of Clermont and the First Crusade", *Studia Gratiana*, XX, 1976.
- Tutthill, E., The Appeal of Alexius for Aid in 1095", *University of Colorado Studies*, IV, 1907.
- Villey, M., *La Croisade, essai sur la formation d'une théorie juridique*, 1942.
- (京都教育大学助教授)